

一九一九年、ヴ・ナロードをめぐる概念連関

——雑誌『デモクラシイ』と知識階級論

木村 政 樹

一 はじめに——一九一九年の知識階級論

帝政ロシアの革命運動において、ヴ・ナロードという標語があったことはよく知られている。戦前期日本には、ロシアの文学や思想に憧れながら、日本の現実のなかにこの概念を持ち込もうとした人々が存在した。という、まず想起されるのは、石川啄木の「はてしなき議論の後」のなかにある、「V NAROD」と叫び出づる者なし^①の一節であろう。

一九一九年、平貞蔵は新人会の機関誌『デモクラシイ』^②の最後の号において、この啄木の詩を引用しつつ、ヴ・ナロードについて熱烈に語っている。

われも知る、知と行を分ち難きかのテロリストの悲みを。
とは詩人啄木の嘆きであった。数年を経た。今や見よ、純真なる良心と透徹せる理智とを有する若き有識者の或者は、煤煙咽び、鉄機轢る所に到り、覚醒せる労働者と握手して新時

代憧憬の熱望を披瀝し合て居る。遠くを見れば、ロシアの新社会学、西欧の新学説は、早くも労働者時代の為に建設を急げる観あり、我国の講壇にも信仰を以て新哲学を説く教授を見出すのである。「……」

われらの且つ読み且つ議論を闘す事、
しかしてわれらの眼の輝けること、
五十年前のロシアの青年に劣らず、
われらは何を為す可きかを議論す。
されど誰一人、握りしめたる拳に卓をたゝきて、
ブナロツドを叫び出づるものなし。

(啄木、はてしなき議論の後)
今や悲嘆的にブナロツド(人民の中に行く)を叫ぶ者なくも、止み難き感激を以て、青年学徒が、虐げられし人々の中に投ずる^③。

啄木の時代とは異なり、それから「数年を経た」現代において

は、「青年学徒」によるヴ・ナロード運動が「止み難き感激を以て」実行されている。このような平の主張は、『デモクラシイ』という雑誌で形成されていた論調に沿うものだといえよう。同誌のページを繰っていくと、ロシア文学・思想に関する知が、新人会の主張の前提を形成していたことがわかる。

まず、第一号には、ツルゲーネフの『処女地』の一節が、相馬御風訳で掲載されている。この小説はロシアの革命運動に材を採ったものである。また、第二号および第三号には、啄木の「はてしなき議論の後」が載せられている。こうした文学作品が持つ力は、運動の実践とも結びつくものだった。たとえば、新人会は亀戸にあったセルロイド工場に分会を作ったが、その発表を報告する記事には、『処女地』の文章が合い言葉のように使われたことが記されている。平の文章もまた、労働運動の実践を具体的に念頭に置いていると考えられる。^{⑤⑥}

これらの言説は、現在の私たちが新人会に抱いている印象とうまく重なり合うだろう。新人会は、赤松克麿・宮崎龍介・石渡春雄などの東京帝国大学の学生たちを中心として、一九一八年十二月に結成された。第一次世界大戦とロシア革命を背景として、大正デモクラシイの機運のなか、ヴ・ナロードの情熱に突き動かされた青年たちの団体として記憶されている。一見したところ、彼らの主張はわずか一文で要約できるように思える。すなわち、我々「知識人」^{インテリゲンチヤ}は人類解放のため、貧しい「人民」^{プロレタリア}（ないしは「労働者」）の中に殉教的な精神を以て身を投じるべきである、と。

このような理解が間違っているといいたいわけではない。た

だ、留意したいのは、この時期に用いられた社会思想のことばは、確固たる定義や体系をもたない不安定なものであったことである。とりわけ、「知識人」や「人民」^{インテリゲンチヤ}にまつわる基本的な語群そのものが論争的な問題を孕んでいた。その具体相を探ってみたとき、新人会のヴ・ナロードをめぐる言説は新しい相貌を私たちの前に現すだろう。

一九一九年は、論壇において知識階級論が隆盛した年として知られている。^⑦一般的にはまだ新語であったといえる「知識階級」ということばは、新人会周辺においていかに用いられたのだろうか。本稿では、雑誌『デモクラシイ』を中心にそれを検討することとで、戦前期日本の社会思想用語の論理形成と言説実践の一面を描き出したい。

二 ヴ・ナロードに関するリテラシー

まずは、概念的な視座からヴ・ナロードと「知識階級」概念に関する論点を整理していきたい。先行論では、新人会のうち麻生久のグループがロシア文学の影響を受け、ロシアの革命運動を理想化していたことについて論じられてきた。^⑧麻生や棚橋小虎、野坂参三、岡上守道らが集まった木曜会では、ロシア革命についての研究も行なわれたとされる。麻生のグループは、労働団体の友愛会を労資協調的な方向から転換しようとする改革運動に携わった。このようにからは、社会思想の知識を習得しながら、労働運動にも大きくコミットしたのである。

友愛会の会員だった野坂は、一九一六年の段階で友愛会の機関

誌『労働及産業』で次のように述べていた。「露西亜には『民衆の中へ!』と云ふ叫び声と共に、所謂知識階級は民衆の中に突き入つて蹂躪られた労働者、下級民を奴隷の境遇より救ひ出した。」「顧みるに、現今日本の知識階級に何んの叫び声があるか¹¹」。野坂は自伝のなかでこの論考を引いて、「こういう文章を書いたわたしが、友愛会の実情を見たとき、会が初期の労資協調主義から、漸次、脱却しつつあるとはいへ、依然として、思想的に混迷している事実に、強い不満をいだかざるをえなかった」と振り返っている。ここで「不満」という言い方で表現されている葛藤は、鈴木文治が主導する友愛会のあり方の否定として一義的に処理することの困難な問題を照らし出しているといえよう。この言もふまえたうえで、「現今日本の知識階級」を問題化する野坂のテクストをみたとき、そこにはヴ・ナロードに関するリテラシーが孕んでいる批評性を見て取ることができる。

ここであえて「リテラシー」ということばを用いたのは、体系的同一性としての「理念」や、集团的同一性としての「組織」といった議論に還元することを避け、異種混交的な言説の共存や拮抗の様態を捉えるためである。野坂はこの後、『社会改良』の編集を行ないつつ同誌に執筆することになるが、池田信によれば、そこでの野坂の論考は「一方では官憲による言論弾圧をさけるために、他方では本誌の理念にあからさまに対立するのをさけるために、きわめて屈折した表現になっている¹³」という。こうした「屈折した表現」を、どの程度友愛会に対する批判として捉えるかは、解釈によって変わってくる。こうした解釈可能性に開かれ

た言説の領域を扱うためにも、リテラシーという視座を導入しておきたいのだ。

鈴木文治は『社会改良』の「発刊之辞」で、「社会諸階級調和」という理念を掲げながら、次のように述べていた。「予は翻訳が嫌ひである、特に估価なる直訳が最も嫌ひである。」「日本には日本固有の流風もあるから、之を捨てず、之に基づいて更に欧米の流儀を参酌し茲に日本思潮と世界思潮と滾然相融和したる新解決法を編出したいと思ふのである¹⁴」。このように鈴木は、思想の直輸入を嫌悪する心性を表出している。もちろん、この主張を社会主義思潮との対立という観点から整理することは可能だが、警戒しなければならぬのは、「思想」や「運動」をツリー構造によって理解可能なものとしてしまうような認識の枠組みである。とはいへ、「思想」や「運動」をひとつの単位に同定してしまうことそのものを問題としたいのではない。単位を構成したものとして言説を捉える、という所作そのものが実践としてなされる様態もまた分析の対象に繰り込む必要があり、そのためにはまず、知の不定形なありようから考えてみる必要があるのだ。

その点で、麻生の自伝的な作品、『黎明』はきわめて重要なテクストである。作中では、ロシアのヴ・ナロード運動を理想視する「知識階級」の学生が、「労働者」の中に入っていく際の軋轢や葛藤が繰り返し描かれる。ここで焦点化されたのは、「労働者」による「知識階級排斥」の問題だった。麻生が一九二〇年代前半に発表したテクスト群はその後の研究でも重要文献として利用され、戦前期学生運動イメージの形成に大きく寄与した。

新人会研究の古典的著作である、菊川忠雄『学生社会運動史』

は、学生社会運動のヴ・ナロード認識について、次のように批判的に捉えている。「我國の学生社会運動も、インテリの黎明期にあつては、一応ヴ・ナロードの運動であるかの如く考へられ」、「就中、ツルゲネフの小説に活躍する主人公達に模倣するかの如きものがあつた」が、「当時の日本の学生社会運動の出發が、ロシアのヴ・ナロードと異なる社会的情勢からなされて居ることは考へ及ばなかつたのである」¹⁷⁾。ロシアのヴ・ナロードと日本をアナロジーする思考が「社会的情勢」の把握に失敗したという菊川の主張は、当時の社会科学の認識の視座にもとづくものだが、一周回って鈴木本の「佶偁なる直訳」批判の論法を思い起こさせもする。

菊川以後の研究は、新人会の思想と運動を実証的に捉え、数々の知見を生み出してきた。菊川の問題関心であつたといえる、学生および学生社会運動の社会的条件についての考察も、形を変えつつ近年に至るまで継続されている。また、新人会会員についての考察は、「転向」問題と関連して行なわれてきた。これらはいずれも知識人論の典型的なテーマである。つまるところ、《知識人とは何か》という問いに歴史的に向き合う際に、新人会という集団に光が当てられてきたともいえる。本稿では「知識階級」という語の運用そのものを検討することで、この問題に接近することとを試みる。

三 ロシア・インテリゲンチヤと「知識階級」

『デモクラシイ』の最後の「編輯便り」には、「新人会が誕生してから一ケ年たちました。過ぐる一年の間新人会が宣伝してきた精神は既に諸卿の御存知の事と思ひます」「デモクラシイ」の発行による思想宣伝がその主なる事業です」²⁰⁾との文言がある。では、新人会の思想や精神を表現するメディアとしての『デモクラシイ』において、「知識階級」概念はどのように展開されたのだろうか。

第一号の「発刊の辞」では、「誰が現代日本改造の局に當るべきか」という問いかけがなされている。「現在国民の指導的地位に立てる特権階級は如何、有識階級は如何、官僚軍閥、政党政治家、資本家、大学教授——彼等に資格無き事は彼等の過去現在の行状が最も雄弁に立証して居る」。「改造の主動者たるべき者は純真なる良心と聡明なる理智と熱烈なる氣魄とを有する青年自身でなければならぬ」²¹⁾。このように、「発刊の辞」は「改造の主動者」である「青年」の価値を高らかにうたいあげたマニフェストとなっている。その際、「青年」という存在が、「特権階級」「有識階級」とは区別されていることが注目される。

続けて、麻生久「青年智識階級の一使命」には次のようにある。「青年智識階級の一使命は、政治的資本的能力階級と労働階級との間に介在して其抱懷する社会的真理の理想を実現する事に在る」²²⁾。二つの階級が対立し「暴動破壊の悲劇」に陥るのを防ぎ、「両極端にある二階級の合理的覚醒を促」すことが希求される。

ただ、「嗚呼然し乍ら我が智識階級は果して真理の探求者であり又彼等の味方であつたか」「我等が階級の過去は黒くぬりつぶされてゐる」と言われるように、かつて「資本家の擁護者」となっていた「智識階級」は批判の対象とみなされている。そのうえで、「今こそ真実なる智識階級は青年の手に依つて生れんとしてゐる」と述べられる。²²つまり、過去の「智識階級」と、「真実なる智識階級」としての「青年」が区別されているのだ。

麻生の「智識階級」概念の用法と似通いつつもやや異なるのが、第二号にある岡上守道の文章である。

◎智識さへあれば「智識階級」に属する者と思つてはならぬ。それは語源的に間違つて居る此の名は新らしい思想を翹望する學問に忠実な其資産階級に属する青年男女に限る。資産が有つて遊食して居る学徒は此中に這入らない。²³

ここでは「資産階級」に属する「智識階級」が肯定的に用いられるとともに、「資産が有つ」たとしても「遊食して居る学徒」は「智識階級」ではないものとして定義から外される。「語源的に間違つて居る」とあることから、岡上はロシアにおけるインテリゲンチヤ概念を念頭に置いていると考えられる。同時に、「新らしい思想を翹望する學問に忠実な」「青年」という文言は、新人会における「青年」の用法とも通じる。

これらの例からも推測できるように、『デモクラシー』における「知識階級」には微妙な揺れがあった。その用法を大別すれば、

ば、日本の現実に広範に認められる階級としての「知識階級」、新人会に代表される運動の主体、ないしそのような運動の主体に相応しい人物を指す「知識階級」、ロシアのインテリゲンチヤ概念に由来する「知識階級」の三つが挙げられよう。「知識階級」概念はこれらの意味のずれと重なり合いの揺らぎのなかでリアリティを獲得していた。ただし、「語源的に間違つて居る」といった言辞からもわかるように、語の運用や定義に関する厳密さを求める志向がなかったというわけではない。

ここで参照しておきたいのは、麻山改介「麻生久」・黒田礼二「岡上守道」・片島新「佐野学」によつて書かれ、一九一九年六月十八日に発行された『過激派』²⁴である。ここでいう「過激派」とはボリシェビキのことを指している。同書は木曜会メンバーによる研究の成果の一端であり、新人会会員のロシア革命観をうかがうために重要な資料である。全体の構成は、第一篇「過激派発達の歴史」、第二篇「露国に於ける社会思想の歴史」、第三篇「過激派思想と国家及社会」、第四篇「過激派と芸術」の四つに分かれている。

本稿の観点からとりわけ重要なのは、ロシアの「智識階級」について論じた第二篇第一章である。『過激派』という書物については、既に酒井正文が詳細に検討しているが、この点についての要約や分析はなされていないため、詳しくみていきたい。

同書によれば、「露国の革命は、殆んど智識階級の力に依りて成就せられたかと思はる、程に、思想の力が大である。」「吾人は前編に於て革命運動の歴史的回顧をなしたから、本編に於ては革

命の背景たる社会思想の系統的叙述をする。夫れには先づ智識階級なるもの、意義を明かにし、其の発達史を一瞥しておくことが必要である」。(26) このように、同書では「智識階級」について理解することが、ロシアの社会思想を理解するための前提として据えられている。同書では、「智識階級」について次のように説明されている。

智識階級 (Intelligentsia) とは何ぞや。此の名辞は、露国に於ては特殊の意義を有し、文字ある階級、又は智識を生活の源とする階級といふが如き、普通の意味を持つて居らぬ。八十年代に於ける智識階級の闘將ラウロフは、以上の意味と混同されることを恐れて、智識階級を『批判的思索家』の集団なりとした。概括的に此の階級を定義すれば、それは現存の社会制度及び政治組織を批判的に考察し、其の革新を理想とし、古き權威と不斷の争闘を続け来りし、十八世紀末以後の特種な社会的集団を指すのである。[……]

智識階級は貴族階級、資本家階級、若くは労働者階級と謂ふが如き、社会学的に限定された意味を有しない。彼等の中には貴族出身のものもあれば、労働者出身のものも有る。彼等は自己の属したる階級を没却し、且つ一切の社会階級を無視して理想に突進し、共同の敵たる古き社会組織、古き政治組織を斃さんとする。[……]

以上述べたところに依り、智識階級の特質を概括すれば、其の第一は社会的集団たることである。第二は継承的性質を

有することである。第三は自己の階級を没却することである。第四は一切の社会的階級を無視することである。第五は解放の爲めの闘争団体たることである。更に第六の特徴に数ふべきものに反ブルジョアなる性質がある。茲にブルジョアとは、広義の智識階級を指すのであつて、大官、資本家、一部の大学教授等を含むのである。此のブルジョアは自己の智識を以て、専制的勢力を擁護したので、本来の智識階級即ちインテリゲンチアは、これに対しても悪戦苦闘を重ねたのである。(27)

このようなロシア・インテリゲンチア理解が提出されていることは、『デモクラシイ』誌上の知識階級論を読み解く際におさえておくべきだろう。たとえば、「大官、資本家、一部の大学教授等を含む」「広義の智識階級」と「本来の智識階級即ちインテリゲンチア」を区別するところは、麻生の「智識階級」批判とも似通っている。これは、「知識階級」という語こそ用いられていないものの、「発刊の辞」における「有識階級」と「青年」の対比にも通じる論法だろう。

ただ、同書では「智識階級」は「社会学的に限定された意味を有しない」とされているが、誌面での「知識階級」の用法をみると、「労働者」関連の語とは区別して使われる例が多い。先の岡上も、「智識階級」の属する階級について、「資産階級」だと記している。同書執筆者の一人である佐野も、「瑞西で万国労働者協会に加入した」クロボトキンは、「労働者階級と智識階級とが一

身の利害を忘れて社会改革を企つる高貴な光景に感激した²⁸」と書いている。

また、「知識階級」はしばしば学歴と関連づけて用いられる。

「青年知識階級殊に大学卒業生²⁹」という表現はその一例として挙げられよう。学校教育の問題は、階級的利害の問題としても捉えられた。門田武雄は次のように述べている。

現在の社会が学校教育をして全然資本家階級の支配権を合理化し存続せしむる武器となさんが為に学校教育を受けた者を重く使用する。是が為に学校教育を受ける者は自ら其の餌に釣られて去勢教育に甘ずるのである。知識階級が資本家階級の門衛と思はれ喪家の犬と譏られるのは此結果である³⁰。

こうした言説をみると、実質的には「知識階級」と「労働者」は区別して捉えられてきたのではないか、と思えるだろう。だが、『デモクラシー』においては、この二つの用語の境界が曖昧化する言説もまたみられるのである。

たとえば、麻生がそのような文章を残している。一見すると、麻生は自分のことを「労働者」ではない存在だと考えていたように思えるだろう。ところが、第二号に掲載された麻生の「我等労働者の鉄鎖³¹」では、表題通り「我等」「労働者」という観点から、「労働者」の置かれた過酷な環境が縷説されているのだ。こうした場合の「労働者」という語をどのように理解すればよいのかは、さまざまな文脈が絡むため難しい問題を孕んでいるが、階級

概念の運用を考えるうえでこの種の用例を看過することはできない。

こうした用法は、ヴ・ナロードの問題系とも関連している。新明正道は「人民の方へ」のなかで、「我等は自から民衆とならなくてはならない」「我等凡ては民衆として若々しく一つの社会生活をなす事の幸福を知り之を求め且つ確立せんか為め努力しつ、あるのではないか³³」と述べている。「人民の方へ」という新明の主張の背後には、「我等」が「民衆」になるというヴィジョンが宿っていた。付言すれば、麻生は「労働及産業」に発表した「労働運動の真意義」のなかで、「露国に於ける労働運動」の「精神」は、「凡ての人間は知識階級であると同時に労働階級となる」³⁴世界を求めるものだとして述べている。

「知識階級」と「労働者」に区別を設ける思考と、この二つの用語の境界が曖昧化してゆく思考は『デモクラシー』に併存していた。次節では、その論争的な交錯についてもみていきたい。

四 知識階級排斥をめぐる文脈

ここまで「知識階級」の意義について語った言説をいくつか取り上げてきたが、「知識階級」は批難用語でもあった。労働運動は「労働者」のものだという立場から「知識階級」や「指導者」を排斥しようとする、いわゆる知識階級排斥における用例はその典型である。その画期として挙げられるのは、一九二一年だろう。この年、棚橋小虎が「労働組合に帰れ」と主張したことをめぐって反発が起こった。また、労働社のメンバーが『労働者』誌

上で、大杉栄らを「知識階級」として批判するといった出来事もあった。では、その約二年前である、一九一九年における知識階級排斥をめぐる文脈とはどのようなものなのだろうか。この点については様々な指摘がなされてきたが、いまだ考察の余地が残されていると思われる³⁵⁾。

まず、この問題に関連する『デモクラシー』掲載論考を挙げていこう。最初に特筆すべきなのは、友愛会会員の松岡駒吉が寄稿した、「智識階級に希望す」である。この論考で松岡は、「自分の経験に依れば益々労働者を苦め或は抑圧した物は只に資本家のみでは無くして実に智識階級であつた」と主張する。そのうえで、「デモクラシーの闘士」として立ち上がった「智識階級諸兄」を欲待しつつ、三つの「希望」を述べた。一つ目は労働者の実情の研究をして欲しいこと、二つ目は容易に「智識階級」が信用されないことに耐えて欲しいこと、三つ目は俠気や同情だけではなく学問の使命または新文明建設のために努力して欲しいことである³⁶⁾。この松岡の論は、「新人会の若きインテリに対して、その進発に冷水を浴せる様な忠言³⁷⁾」だと捉えられてきた。

第四号では、信友会の平野重吉が職工の立場から活版技術者を煽動している。「我が国に於ては今日智識階級は日夜新聞に雑誌に労働問題の議論を提議し」たりしているが、「姑息なる彼等が紛々たる概括的卓上の汎論は既に尽きた」。「活版技術者諸君」は、「労働者としての自覚に醒め時運の進展を諒解しなければならぬ」。そして平野は次のように言う。「諸君よ我等は他の指導を俟たず自ら進んで運動を開始しなければならぬ」³⁸⁾。これは「労働

者」以外の「指導」を拒む表明だといえよう。

第五号で赤松克麿は、平野に対する反論とも思える文章を発表している。現在「労働者自覚の声」が「叫ばれて居る」が、「然し其の所謂労働者とは何んであるか」³⁹⁾。このように問うた赤松は、「労働者の意義」について次のように結論づける。

凡そ肉体的たると精神的たるとを問はず労働を以て人類社会の文化価値創造に参与し而して秋毫も他人の労働価値に寄生せず掠奪せざる者は凡て是れ労働者である。労働者の意義を偏狭に観念し、排他的階級的感情に駆られて、盲目的反抗の輕挙に出づる事は真正なる解放精神と相容れない。労働者の意義を最も正しく深く理解せよ。⁴⁰⁾

ここで赤松は、「労働者」概念を広く取るよう提案している。第七号には「四郎」の名で、次の文章も掲載された。

△人類解放の尊い熱意に燃ゆる者は共に共同の敵に対して結合せよ。筋肉労働者が何んだ。知識階級が何んだ。大事な時に、さもしいお株の奪ひ合ひはやるまいぞ（四郎）⁴¹⁾

この文章には「筋肉労働者」と「知識階級」を区別する見方への批判が読み取れるが、主張の内容自体は概念への問いというより、自らが論敵とされるような言説のシフトへの批判だといえよう。これと似通いつつ異なる論理が、同号の無記名記事にみられ

る。「労働者はこの運動が無産階級の解放を階段とする人類全体としての文化運動である事を充分認識してその使命を果す為には知識階級を腹心の友とせねばならぬ」ない。「こんな事は云ふ迄もない事であるが近頃浅薄な自殺的誤解がないでもないから一応両者の徹底した反省を求むる次第である」⁴³。この文章では、「知識階級」と「労働者」の区別は認めつつ、「労働者」は「知識階級」を友人としなければならない、と主張されている。

以上の議論では、「知識階級」「労働者」をめぐる思考の再構築が試みられている。これらのテキストは、概念連関の論理的な統一は取れていないが、知識階級排斥をめぐる文脈に照らせば、ひとつの論調を形作っていることがわかる。自他の社会的位置への考察に加えて、同時期に勢いを増してきた労働運動の言論を意識し、語の運用方法が問い返される事態が発生していた。

同年の『労働者新聞』では、北澤新次郎が赤松と同様の問題を取り上げている。まず、「労働者」概念について。北澤は、今日においては「労働者」は「肉体労働者」に限らず、「無資産知識階級の人々をも混へて広く労働者と解する様になつた」という。そのうえで、「筋肉労働者と無資産知識階級」は「相提携して行かねばならぬ」とする。次に、知識階級批判に関連して。北澤によれば、これは「私利私欲を恣にする輩が（多くは無産知識階級の一部に存する）筋肉労働者をだしに使つて」「労働者を悪く利用」したものである。かれらは「筋肉労働者」に「吾々の仲間の中へは知識階級者は入つてはならぬ」と云ふ誤信を抱かしめ、「更に又利用された後はその裏切られた反感に基く」「知識階級を

近づけてはならぬ」と云ふ排他的気分を助長するに至る」⁴³。

これに先んじて、『労働者新聞』の前身である『新神戸』で樺田民蔵は、次のように述べていた。「学生」は卒業すると「官吏役人として、労働者と共に朝夕の電車を賑かす所の他の無産者階級に編入せらるる」。「今日に於ける社会発展の傾向は、智識階級が資本家側に味方するか、又労働者側に味方するかに依りて略ぼ察せらるゝものである」⁴⁴。

これらの議論にみられるのは、肉体労働者に限定されない形で「労働者」「無産者階級」関連語群を把握しようとする志向である。赤松の議論も、こうした階級論の文脈のなかで位置づけられる。もちろん、それは純粹に階級分析を志向したものではなく、組織論上の問いと連動していた。⁴⁵『デモクラシー』第六号には友愛会第七周年大会の傍聴記が掲載されているが、そこには理事の決定に関して、「その選任にもインテリゲンチヤと労働者の歩調がよく整つていよく、無産階級解放運動の為に徹底的に戦ふ準備は出来た」⁴⁶とある。このような総括は、多分に新人会側のバイアスがかかっている。一九一九年前後には「労働者」の自主性の論理や、友愛会に対する批判などの複雑な動向が存在しており、「智識階級」批判も激しく行なわれた。⁴⁹本稿の考察の範囲を逸脱するため、詳述は避けるが、そうした流れは翌年にも繋がっている。赤松は『デモクラシー』の後雑誌である『先驅』創刊号において、『労働運動』に掲載された大杉栄「労働運動と知識階級」への批判を行なった。⁵⁰

ここで新人会メンバーによる友愛会改革の動向に関連するテク

ストをみておきたい。法政大学大原社会問題研究所に所蔵されている棚橋小虎日記をみると、一九一八年から一九九年にかけて「知識階級」と「労働階級」の關係などについて議論していたことがわかる。『労働及産業』一九一九年二月号に掲載された、平沢紫魂〔平沢計七〕「知識階級に一瞥を乞ひ併せて資本家階級及び政府を警む」は、友愛会改革派への提言として把握することができ、松岡の「知識階級に希望す」と併せて、友愛会において「知識階級」問題が問われる事態となっていた。

友愛会にこうした軋轢が生じているなか、棚橋は郷里に帰ってしまう。その棚橋を呼び戻そうとして、麻生久は五月二三日付の書簡を送ったとされる。これは『麻生久伝』に掲載されており、先行論でも繰り返し言及されてきたものだが、そこには次のような文章がみられる。

僕は或は今度、君が帰つてきてからの態度一つでは君と分れて全然別個な運動をしなければならぬかと思つて数日憂悶した。そうなれば今後の日本の労働運動は混乱を来し、或は知識階級と労働者との間に溝渠が出来ないとも限らない。又徒らに無方針に労働者の御氣嫌をとるのは、真理に反することだ。サンジカリズム的傾向はいけない。無智なものに対しては矢張我々は真理をもつて戦はなければならぬ。

麻生は、自分と棚橋が「全然別個な運動」を展開するようになれば、「知識階級と労働者との間に溝渠」が生じることを想定して

いる。また、それに續けて、「サンジカリズム的傾向はいけない」とも述べている。このときの麻生の現状認識が的確であつたかどうかはともかく、ここでは運動ネットワークのあり方に関わる用語として「労働者」および「知識階級」が使われている。

これに加えてみておきたい文章がある。麻生は『労働及産業』一九一九年十一月号において、高野若三郎に国際労働會議の労働者代表委員の辞退を願ひ出たときのことを記しているが、そこには次のようにある。

又我々は次の如き事も云つた。〔……〕今日或は筋肉労働者であると云ひ或は何であると云つて知識階級反対の声も聞こえる。我々は何と云はれても今日の日本の労働運動の状態に於ては未だ我々の如きものが此労働運動の裡に入つて援助すると云ふ事は大局の上から見て労働者其もの、利益であると確信してゐる者である。〔……〕現に今回協議會に出てゐる所謂筋肉労働者と称する所の者は殆ど悉くが野心家のみである。卑しい名譽心の奴隸である。頭に筋肉労働者と云ふ冠りを戴いて労働者を食ひ物にしてゐるのである。もしも労働運動が斯かる種類の者のみに手に委せられたら果たしてどうであらう。〔……〕併し乍ら折角の知識階級の援助も往々にして労働階級の者に悪感を抱かせる。勿論所謂筋肉労働者と称する如き者の野心家の知識階級排斥の如きは意に介するに足らない。けれど共知識階級は夫れ自身の裡に労働運動に対して重大なる欠陥を有してゐる。夫れは他でもない。当にならな

いと云ふ事である。「……」我々は今日此学者と云ふものは
智識階級と云ふものが決して悉く労働者の敵でないと云ふ事
を明かにするために博士は此際意を翻して代表受諾を取消し
て戴きたい。⁽⁵³⁾

「筋肉労働者」による「智識階級排斥」のことは相手にしない
が、「智識階級」は態度を一貫させる必要がある、そのために高
野には「代表受諾を取消して戴きたい」、というのがこの訴えの
趣旨である。これを麻生の棚橋宛書簡と併せてみると、類似した
特徴が浮かび上がってくる。このふたつのテキストで「知識階
級」が持ち出されるのは、分裂の危機のなか相手に対し合同を願
い出るための論法なのである。また、論理的にいつて、このメッ
セージの宛先である棚橋と高野は「知識階級」に属しているとい
うことになる。いわば「知識階級」の連帯と組織の再編成がその
主眼にあるのだ。

もちろん、こうした主張には、エリート主義的な労働運動観が
滲み出ている。ただ、ここで麻生が、現在を歴史の岐路として思
考していることは重要である。麻生の眼前には複数の運動の形態
が可能性として揺曳していた。さまざまな可能性のなかからひと
つの形態が現実化するとき、運動の生態系のみならず概念連関も
また変質する。アナキズムの広がりのおかげで「知識階級」と「労
働者」が対立的な概念として組み替えられたとき、こうした階級
概念の揺動もまた捨象されてしまうこととなる。

五 おわりに——「宣言一つ」論争への脈絡

これまでみてきた「知識階級」概念の独自の位相を浮き彫りに
するため、最後にその後の階級論の行方的一端を確認し、それ
を通じて「デモクラシイ」に伏在していた知識階級論の系列を取り
出してみたい。ここで取り上げるのは、有島武郎の「宣言一つ」
をめぐる論争である。この一件は、文壇・論壇を通して行なわれ
た言論ジャーナリズム流行の議題であり、戦前期の「知識階級」
概念の運用を歴史化するにあたって重要な出来事として位置づけ
られる。

一九二〇年代前半の言論場では、社会主義の影響が広範に拡大
し、階級論が一世を風靡した。労働運動の活性化および知識階級
排斥のムーヴメントを思想的な背景として、一九二二年には有島
の「宣言一つ」に対する異論、反論が巻き起こる。⁽⁵⁴⁾ そのなかで有島
は、他者と議論を続けることによって主張を変化させていった。⁽⁵⁵⁾
ここではそのうち、室伏高信との対話を振り返っておこう。

室伏は「知識階級」について次のように述べた。「知識階級が、
急速にプロレタリアの地位に沈みつつあることは、現代社会の最
も顕著な現象の一つである」。⁽⁵⁶⁾ 有島はこのような室伏の知識階級
論から学ぶことによって、「宣言一つ」で展開した自説を再構築
することとなった。⁽⁵⁷⁾ 室伏がこの主張を展開した際に論拠としてい
たのは、カール・カウツキーの「エルフルト綱領」である。⁽⁵⁸⁾ つま
り、論争における有島の思考の変化には、カウツキーの議論が一
役買っているということになる。

さて、実はこの『エルフルト綱領』のうち室伏が参照した章が、『デモクラシー』第八号に波多野謙「波多野鼎」によって訳出されている。その一節を引いておこう。

以前には「智識上の貴族」と云はれて居たものが今日では「智的」或は「教育ある」プロレタリアートと呼ばれる様になつてしまつた。／「……」彼等の多くは今も尚他のプロレタリアンより上位にあると自惚れて居る。彼等は自分がブルジョアジイに属して居ると考へて居る。丁度下男が自分は主人であると考へて居ると同様の滑稽事ではないか。⁽³⁹⁾

なお、『エルフルト綱領』は、新人会会員だつた三輪寿壯の訳によつて一九二三年に大鑑閣から出版されている。これが「宣言一つ」論争にも繋がつていく論点であることを考えると、新人会のリテラシーのなかには、翻訳というかたちで「労働者」概念を考察する土壌が形成されていたといえるだろう。

ここまでの考察でみてきたように、『デモクラシー』では「労働者」という語の意味内容が、教育制度や大学卒業後の社会的位置の問題を含めて問われることがあった。あるいは、松岡の「智識階級に希望す」には、次のように書かれている。「乍然智識階級は結局労働者の味方でなければならぬ。何となれば彼等の多数は又一個の労働者である」。⁽⁴¹⁾ここでは「智識階級」もまた「労働者」であるという見解が提示されているが、この点については以上展開されていない。したがって、文意は明確ではないが、「知

識階級」を「労働者」と捉えることは、新人会の東京帝大出身者による党派的な判断に限定されるものでないといえるだろう。そしてこの問題はその後の歴史のなかで、さまざまな論客によって深められていった。

新人会の主張は一見すると、「知識人」^{インテリゲンチヤ}は「人民」^{ナヒブ}のなかに宗教的情熱をもつてコミットしていかなければならない、といった構図に回収できるようにみえる。だが、本稿で示してきたように、『デモクラシー』という雑誌は階級概念の揺動を孕み込んだ複層的な知が生成するなかで、知識人論上の文学・思想をめぐるリテラシーが醸成されてゆく場としてあつたのである。

注

(1) 石川啄木「はてしなき議論の後」『創作』一九一一年七月号、一頁。

(2) 『デモクラシー』からの引用は、法政大学大原社会問題研究所編『日本社会運動史料 機関紙誌篇 新人会機関誌 デモクラシー 先驅 同胞 ナロオド』（法政大学出版局、一九六九年）に拠り、号数と発行年月を記した（巻数はすべて「第一巻」のため省略）。また、同誌掲載論考の筆名の本名推定も同書にしたがった。

(3) 平貞蔵「有識者の従属的地位」『デモクラシー』第八号、一九一九年二月、九頁。この平による啄木の引用は正確なものではない。

(4) 『デモクラシー』に掲載されたこれらの文学作品については、

これまでも注目されてきた。H・スミス『新人会の研究——日本学生運動の源流』（松尾尊允 森史子訳、東京大学出版会、一九七八年）、五〇—一頁、内川正夫『デモクラシイ』の思想（中村勝範編『帝大新人会研究』慶應義塾大学法学研究会、一九九七年）、三六頁などを参照。

(5) 「誰か、」処女地！未墾の土地！それを耕す職責は我々にある。日本は処女地だ、どこでもこゝでも。」とやる。その言葉の熱烈さ、柔らさそして力強さ！「それを耕すには鉄ではない、土に深く喰ひ入る犁を使はなくてはだめだ。君知つてゐるだらうあの粘土の山をさ。」一人がツルゲエネフばかりで意味ありげにやり返すと側にゐた二人が同時にうなづく。（『血潮子』）「宮崎龍介」「亀戸の夜雨」「デモクラシイ」第二号、一九一九年四月、一六頁。

(6) 麻生久ら新人会会員の一部分が、労働者の居住地域である月島に住んでいたことはよく知られている。平も「月島に住みついた」（H・スミス前掲書、七二頁）という。

(7) この時期の「知識階級」言説の論調を概観したものとして、奥田修三「大正期「知識階級」論」（『立命館大学人文科学研究所紀要』第十五号、一九六五年三月）、森山重雄「有島武郎における生の二律性認識——付・知識階級の位相——」（『実行と芸術』塙書房、一九六九年）を挙げておく。

(8) 資料には、「知識階級」「智識階級」の二つの表記がみられる。引用の際は原文通りとし、筆者が両方を含めて語を指示する場合は「知識階級」と記した。

(9) H・スミス前掲書、中村勝範編『帝大新人会研究』（慶應義塾大学法学研究会、一九九七年）ほか、多くの新人会・友愛会関連の研究が考察している。

(10) この会の呼び名について、本稿では法政大学大原社会問題研究所に所蔵されている棚橋小虎日記の一九一八年二月五日、一二日に記されている「木曜会」という呼称を用いた。棚橋の自伝をもとに棚橋小虎自伝編集委員会が編集した『小虎が駆ける』（毎日新聞社、一九九九年）でも「木曜会」が使われている。

(11) 野坂鐵嶺「野坂参三」「愛と智と力」『労働及産業』一九二一年一月号、五六頁。

(12) 野坂参三「風雪のあゆみ（一）」新日本出版社、一九七一年、三七頁。

(13) 池田信「解題」法政大学大原社会問題研究所、総同盟五十年史刊行委員会編『日本社会運動史料 機関紙誌篇 友愛会（社会改良社） 機関誌 社会改良』法政大学出版局、一九七七年、四三二頁。

(14) 同右、四三三—四頁を参照。

(15) （鈴木生）「鈴木文治」「発刊之辞」『社会改良』第一巻第一号、一九一六年五月、一頁。

(16) 麻生久『黎明』新光社、一九二四年。

(17) 菊川忠雄『学生社会運動史』中央公論社、一九三一年、一〇四頁。この菊川の主張は、林房雄「学生社会科学運動の過去現在」（『改造』一九二五年新年号）に依拠して行なわれている。

(18) 竹内洋『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』

(中公新書、二〇〇三年)、後藤美緒『東京帝大新人会と戦後日本——知識人のライフコースの研究』(博士論文「筑波大学」、二〇一四年)を参照。

(19) 判沢弘・佐貫惣悦「前期新人会員——赤松克麿・麻生久」思想の科学研究会編『共同研究 転向1——戦前篇 上』平凡社、二〇一二年。

(20) 無記名「編輯便り」『デモクラシイ』第八号、一九一九年一月、三六頁。

(21) (親風子)「赤松克麿」『デモクラシイ』第一号、一九一九年三月、二頁。

(22) 麻生久「青年智識階級の一使命」『デモクラシイ』第一号、一九一九年三月、三頁。この論考を知識階級論として考察したものと、神田文人「学生の社会主義運動機関誌——『デモクラシイ』から『無産農民』まで——」(『思想』一九六三年二月号)。麻生のロシア文学理解や知識階級論については、増島宏「社会民主主義者の「革新」——麻生久を中心として——」(篠原一・三谷一太郎編『近代日本の政治指導』

東京大学出版会、一九六五年)、伊藤晃「麻生久の思想について(2)」(『千葉工業大学研究報告 人文編』第二十九号、一九九二年)も参照。

(23) (禮二)「岡上守道」『臺町私語』『デモクラシイ』第二号、一九一九年四月、一五頁。

(24) 石川六郎編『過激派』民友社、一九一九年。

(25) 酒井正文「『過激派』考——新人会との関連において——」

中村勝範編『帝大新人会研究』慶應義塾大学法学研究会、一九九七年。

(26) 前掲『過激派』、二〇一一年。

(27) 同右、一二一—四頁。

(28) 佐野学「クロボトキンの社会思想(二)」『デモクラシイ』第五号、一九一九年七月、九頁。

(29) 三輪寿壮「虫眼鏡」『デモクラシイ』第八号、一九一九年二月、一七頁。

(30) 門田武雄「鑄型的教育」『デモクラシイ』第八号、一九一九年一月、一三—四頁。

(31) 麻生久「我等労働者の鉄鎖」『デモクラシイ』第二号、一九一九年四月、三頁。

(32) 「我等」『労働者』という言説をめぐるいくつかの重要な指摘を考慮しておく必要がある。野坂は自伝のなかで、

「われわれ労働者」ということばを用いるに至った経緯として一日労働者体験を挙げているほか(前掲『風雪のあゆみ(一)、二九頁)、労働運動内でそのような言い方をしたことの意味について詳述している(『風雪のあゆみ(二)』新日本出版社、一九七五年、九三—九頁)。また、大和田茂「労働文学——プロレタリア文学への先駆的役割」(『社会文学・一九二〇年前後 平林初之輔と同時代文学』不二出版、一九九二年)は、加藤一夫の「我等も労働者である」を考察し、

「加藤の労働者観、文化運動論には「階級」の観念が欠落し

ていた」(二九二頁)と指摘している。

- (33) 新明正道「人民の方へ」『デモクラシイ』第六号、一九一九年九月、二頁。

- (34) 麻生久「労働運動の真意義」『労働及産業』一九一九年七月号、六頁。

- (35) 先行論では、羽田博昭「友愛会の急進化過程における知識人排斥問題」(『駿台史学』第五九号、一九八三年九月)がまとまった整理を行なっているが、羽田は友愛会の知識人排斥問題を一九二一年の棚橋小虎失脚にみており、一九一九年に関しては前史的位置づけとなっている。その他の研究については随時言及する。

- (36) 松岡駒吉「智識階級に希望す」『デモクラシイ』第二号、一九一九年四月、一一頁。

- (37) 麻生久刊行委員会編『麻生久伝』麻生久刊行委員会、一九五八年、一二三頁。この時期の「知識階級」批判については、『黎明』や『麻生久伝』のほかにも多くの指摘がある。佐々木敏二「新人会(前期)」の活動と思想」(『キリスト教社会問題研究』第十三号、一九六八年三月)は、棚橋が帰郷し松岡「智識階級に希望す」が発表されたころ、友愛会に「知識階級を排斥せよ」の声がたかまっていた(一六九頁)としている。また、古川江里子「立身出世としての社会運動——帝大新人会エリートたちの挑戦と挫折——」(『日本歴史』第七〇二号、二〇〇六年十一月)は、「知識人排斥運動は、『……』一九一九年五月に棚橋に対して起り、再び二一年七月に

棚橋、麻生に対して発生した」とするほか、知識階級と労働者の「反目は、棚橋ら帝大出身者が労働運動に参入した当初からあった」のであり、松岡「智識階級に希望す」は「それが表明された」ものだとする(五九頁)。先行論におけるこの時期の記述は、論者ごとの資料の扱い方や証拠の提示の仕方はもちろん、麻生、棚橋、松岡、平沢計七らの関係が複雑であったこともあつて込み入っている。本節で扱うのは、広義の「知識階級」批判である。「排斥」かどうかを個々のケースで問うものではない。ただ、一九一九年の「知識階級」批判をそれ以後の文脈と繋げて考えるために、ひとまず「知識階級排斥をめぐる文脈」として広く捉えておく。知識階級排斥概念を過度に固定化することは避けたい。「信友会」は特に智識階級を排斥しない。たゞ関係する事を拒絶するのみだ」(一信友会員「信友会の立場——K・A生氏に申す——」『労働運動』一九二〇年二月一日、一二面)というように、「排斥」か否か自体が争点となる問題だからだ。以上の事は、「知識階級」という語の運用を考察するという本稿の方法とも繋がっている。

- (38) 平野重吉「全国の活版技術者諸君に飛徹す」『デモクラシイ』第四号、一九一九年六月、一五頁。平野重吉「平野小剣」については研究の蓄積がある。朝治武「差別と反逆 平野小剣の生涯」(筑摩書房、二〇一三年)を参照。

- (39) 赤松克麿「解放運動の真精神」『デモクラシイ』第五号、一九一九年七月、三頁。

(40) 同右、同頁。

(41) (四郎)「赤松克麿」「村人語」「デモクラシイ」第七号、一九一九年一〇月、一六頁。

(42) 無記名「労働者と智識階級」「デモクラシイ」第七号、一九一九年一〇月、三頁。

(43) 北澤新次郎「労働者専制反対」労働者階級と無産知識階級との提携が必要」『労働者新聞』一九一九年八月二〇日、一面。
(44) 樋田民蔵「学生と労働者」「新神戸」一九一九年二月二〇日、三面。

(45) この点に関して、先に挙げた野坂の自伝も参照されたい(前掲「風雪のあゆみ」)、九三—九頁)。

(46) (与三吉)「山崎一雄」「友愛会大会傍聴記」「デモクラシイ」第七号、一九一九年一〇月、一五頁。佐々木前掲論考はこれを、「麻生、棚橋の友愛会での活動に期待している山崎らの心境がうかがわれる」(一七四頁)としている。

(47) 無記名「新人会記事」(『デモクラシイ』第七号、一九一九年一〇月)には次のようにある。「△九月一日の友愛会大会及七日の信友会大会に赤松山崎出席、共に労働会議代表者選出が議事となつて活気を呈した、ほゞ私どもと同じ精神に向つて有力な労働組合が近いて来るのは愉快である」(一六頁)。

(48) 渡部徹「一九一八年より二年にいたる労働運動思想の推移——サンジカリズムへの傾斜の過程——」(井上靖編『大正期の政治と社会』岩波書店、一九六九年)を参照。なお、この問題は、友愛会はもちろんアナキズム全般の動向にも関わ

るため、別稿を期したい。

(49) 「日本労働新聞」のあるコラムでは、「智識階級及び中間階級」のうち「資本家の味方と称する者」や「自ら労働階級の味方であると称し乍ら資本階級に歛を通じてゐる者」が、「我等の黒表」に挙げられている(「我等の黒表」『日本労働新聞』一九一九年六月一日、六面)。この「黒表」のなかには鈴木文治もいる。

(50) 赤松克麿「労働運動と知識階級の問題(評論の評論)」『先驅』創刊号、一九二〇年二月。酒井正文「『先驅』時代の活動」(前掲「帝大新人会研究」)を参照。大杉は、「實際労働者には排斥しなければならない謂はゆる知識階級の奴等がうちやうちやゐるのだ」(「労働運動と知識階級」一九二〇年一月一日、一七面)と述べているほか、大日本労働総同盟友愛会の労働者が「反知識階級熱を昂めつゝある」(「知識階級に与ふ」『労働運動』一九二〇年一月一日、一面)とも記している。

(51) 棚橋小虎日記の一九一八年一月一六日、一二月一六日(平沢計七と議論)、一九一九年一月三十一日(松岡駒吉の意見)。前掲「小虎が駆ける」も参照。

(52) 前掲「麻生久伝」、一二六頁。

(53) 麻生久「不当なる労働者代表委員選挙に対し我会の執りたる態度類末報告」『労働及産業』一九一九年十一月号、二五—七頁。都築久義「尾崎士郎と平林初之輔——「ごろつき」論争をめぐって——」(『愛知淑徳大学論集』第三号、一九七八

年三月）は麻生のこの論考を引き、それに続けて「かくして「……」友愛会でさえ、自覚した労働者が知識階級による指導への不満や批判の態度を表面化させた」（一一四頁）と述べている。麻生が「知識階級」の「欠陥」として問うた箇所については、たしかに友愛会内の問題も示唆していると解釈できる。ただ、「協議会に出てゐる所謂筋肉労働者と称する所の者」に関して麻生は批判的であり、「所謂筋肉労働者と称する如き者の野心家の知識階級排斥」を一蹴していることには留意したい。また、同論考で都築は、友愛会が「大日本労働総同盟友愛会」になったことで「知識人指導の運動はいよいよ限界となった」（一一四頁）としているが、麻生や平沢の立ち位置ひとつをとって考えてみても、こうした判断は事態を単純化している。

麻生も有島に批判的に論及しつつ、「知識階級」のありがちな欠点や「知識階級排斥と云ふ言葉」についての認識を示している（麻生久「森本博士と有島武郎氏」『解放』一九二二年五月号、一一八頁）。

以下の拙稿を参照。「知識階級と藝術家——有島武郎「宣言一つ」論争——」（『有島武郎研究』第一四号、二〇一一年六月）、「（知識人）言説の歴史を再考する——「有島武郎」の概念的的位置をめぐる——」（『有島武郎研究』第一六号、二〇一三年六月）、「有島武郎の後期評論に関する一考察——アナ・ボル提携という状況——」（『有島武郎研究』第二二二号、二〇一九年五月）。

(56) 室伏高信「階級闘争に於ける知識階級、文化、及び芸術の問題」『批評』一九二二年四月号、三六頁。

(57) 詳細は、前掲拙稿「知識階級と藝術家」で考察した。

(58) 室伏前掲論考、三三—三五頁。

(59) （カウツキイ）「プロレタリアート」波多野謙「波多野鼎」訳、『デモクラシー』第八号、一九一九年二月、二五頁。

(60) カウツキイ『社会民主党綱領——エルフルト綱領——』三輪寿壮訳、大鐘閣、一九二三年。当初は「新人会叢書」として企画されていた。『同胞』一九二一年一月号、『ナロオド』一九二一年十月号に広告がある。

(61) 松岡前掲論考、一一頁。

・本研究は、東海大学総合研究機構「スタートアップ支援」の援助を受けて行なったものである。

・本研究は、JSPS科研費J20H01233の助成を受けたものである。
(きむら・まさき 本学特任講師)